

元気な女性部活動に注目しよう

お話し：海とくらし研究所 代表 関いずみさん

インタビューアー：中島 満



●プロフィール

「せきいずみ」さん：東京都生まれ：ダイビング経験から漁業・漁村に興味を持ち、平成5年漁港漁場漁村技術研究所に転職。平成19年同所を退職「海とくらし研究所」を立ち上げる。漁村にくらす人々の活動を主題に、漁村女性の就労環境・ライフスタイル、漁業後継者実態、漁村景観、漁村ツーリズムなどの調査研究を行う。また、三木奈都子さん（水産大学校）、副島久実さん（同校）と三人で、漁村にくらす女性の活動を応援しようと「うみ・ひと・くらしフォーラム」をつくり、各地でシンポジウムを開くなど、これからの沿岸漁業が向かう方向を見極めようと、全国の浜の現場に足を運んでいる。

【リード】

JF女性部はこれからの漁業・漁村のなかで、どのような役割を演じ、また漁家のくらしを支えながら、どのような活動に重点をおいていったらよいのか。

このテーマを持ち、各地の女性部活動の情報交換とネットワークづくりの橋渡し役ができないだろうか、エネルギーに全国を走り回っている女性グループがいます。それぞれ仕事を持ちながらアイデアと若いパワーで立ち上げた「うみ・ひと・くらしフォーラム」の三人の女性です。

浜の現場から地域のホットなテーマ、悩みを掘り起こし、全国的な視野の広いテーマとリンクさせ、地元でなければ語り合えない地域シンポジウムや調査活動を地道に続けてきました。

メンバーのひとりである、関いずみさんに、活動を通じて「今何かが変わりはじめている」という、女性部活動の「何か」について、ズバリとお話を伺ってみることにしました。

広がった活動を支える力

——漁協「婦人部」と呼ばれていた時代から今では「JF女性部」の名称になりました。この間、浜の女性たちの活動にずっと焦点を当て続け、現場に精力的に足を運んでこられました。そのなかで最近はどうな課題にぶつかっていますか。

JF女性部の「役割」とか「課題」となると、大きすぎて答えずらいので、浜の女性たちと情報交換しながら、見聞きした範囲で、最近感じていることを整理してみましょう。

漁村の女性たちは、これまでずっと、JFの組織では業務として扱わずらい地域活動をボランティア的な立場で行ってきました。その活動の特徴は、大きく二つに位置づけられます。

一つは、石鹼普及運動や植樹活動のような環境を考えようという取り組みです。

もう一つは、水揚げされても値もつかないような漁獲物を、「商品化」して活かさないかという、暮らしを支える女性ならではの活動で、魚食普及の活動や食育の啓発活動とも連動しています。

最近では「起業」化という経済的な取り組みを始めたところも出てきました。

さらに、もう一つ、漁村の暮らしと福祉活動がありますが、今回は前の二つに絞ります。この二つだけをとってみても、活動の幅が、とても広がってきました。そして、順調にこれまできた事例の場合

も、さらにステップアップするためには、活動母体となるグループの取り組みかたに、ひと工夫が必要な段階にきているような気がします。

——具体的にターニングポイントとはどういうことでしょうか。

「起業」を始めたところのように、はじめは、無我夢中で、資金不足ぎみでも、持ちこたえようと、意思を一つにして、がんばってきたんですが、5年たち6年たち、このままでよいのだろうか、という時期が来ます。

このとき、その次にどうするか、という場面で、いろいろな変化が起こってくるように思います。

長く活動を続けている場合、ある特徴がみられます。こうした段階を、のりこえようとした結果の変化ともいえます。

最近起きている「変化」とは

女性部活動を続けながらも、そのなかの「有志」を中心とした活動に、試行錯誤をしながら、「実体」が移っていくという例が出てきている気がします。

新しいアイデアがあるのだけれど、これを実行するかどうかという決断には、リーダーがどれだけリーダーシップを発揮しても、全体の意思統一を図るには時

間がかかるものです。JF（漁協）の同意も必要です。JF（漁協）合併によって女性部の加入人数が多くなる場合もあります。そうすると、どこかで、「有志」のグループ活動として続けていく選択が求められるわけです。

二つの例を紹介します。ひとつは、「佐賀市漁村女性の会」の場合です。

ノリ養殖漁業の地域にあって、「出荷できないキズ海苔を使って新しい製品を作れないか」と、まず「海苔の佃煮」開発から始まりました。それが「うまかの^{ばい}梅」と、絶滅危惧種「アサクサノリ」100%で「一番摘み」だけを使った「肥前あさくさ」です。さらに、アイスクリーム「焼のりアイス」が好評です。

そもそも、JF(漁協)女性部活動としてはじまりましたが、現在は、有志女性が独立したグループとして経営しています。

有志活動として独立して起業

もう一つ、高知県^{すくも}宿毛市^{さかさき}の「^こ栄喜^{ひめ}っ娘^{いち}ひめ市」の場合は、もともと地域のなかで女性部とは別に個人のグループ活動です。まき網漁業漁家のおかあさんたちが集まって5年前結成されました。まき網で漁獲され、市場流通に乗りにくい小型魚を買い取り、天ぷら、寿司などの惣菜に加工して、トラック行商で市内を販売してまわる活動をしています。(右上写

真)



(写真提供: 関いずみさん(c))

固定客も増え、夕方からの販売には、働く女性たちの味方と、市民のひとたちにもとても好評です。

——個人のグループ活動も増えてきているんですか。

増えてきていると思いますが、成功すればしたで、地域のあつれきのなかに立たされる場面もでてくるそうです。地域の中で「気になる存在」になるということは、活動や経営のステップアップをはかる段階で、このような課題もでてくることを知っておく必要があります。

成功しても、なやみを抱えながら、それをなんとか乗り越えようと、知恵を出し合いながら、勇気もだしあって新しい活動の拠点という「風」がようやく吹き始めているのかなあというのが実感です。

「物語性」をもった活動の展開が必要です

——女性部はJFの組織ですから役員の

交替など、組織内の問題もあれば、JFの外に出て地域の人たちを巻き込んで活動をする場合の課題もある。長く続けていくためには、どんな「風」を造っていけばよいのでしょうか。

また、難しい質問ですね。最近、感じていることですが、長く続いている活動には、かならず、背景にはっきりとした「ものがたり」があります。これを「物語性」ということもあります。イベントをして、参加者に「ああ！参加してよかった！」「楽しかった！」と、訴えかけるインパクトが必要なのです。

全国のJF（漁協）で数多くおこなってきた森に木を植える植樹活動は、女性部が大きな役目を果たしてきました。

岩手県JF田老町婦人部の場合は、岩手県全域で取り組んできた「合成洗剤をなくそう」という石鹼普及運動を積極的に活動してきた実績があります。こうした強いJF女性部の結束力を基盤にして「婦人の森」づくりという植樹活動や海岸清掃を漁場環境保全活動として行ってきました。

植樹活動は、漁業者が木を植えるという「物語性」によって、魚を食べることと、海の環境を守ることと、JFや女性部の活動とを、市民の人たちにも、結びつけ印象付けることになったのです。

話題性を提供したということで、1県1単協になった「JFおおいた」の旧JF（漁協）で、使わなくなった市場施設を活用した女性部の活動があります。

がらんとした広いスペースをそのままさびれたままにするのは「もったいない」と「朝市」を開くアイデアが、JFおおいたの女性部長さんに浮かびました。

そして彼女の奮闘によって実現したのが「美濃崎漁師市」です。

女性部長さんは、遠くから車でやってきて、早朝から並んで買っていつてくれるお客さんに食べてもらおうと「漁師の朝定」をバイキング方式で出したところ、これが「おいしい」「たのしい」とさらに評判を呼ぶことになりました。小さな食堂は、使わなくなった旧漁協事務所を改造したものでした。

地域を「回して」いく役割りに着目しよう

——女性だからこそできたアイデアともいえますね。

女性部が、一部の意欲をもった人だけで活動するだけではなくて、みんなが参加できるような仕組みに変化させた女性部長さんもいます。

愛媛県JF渦浦女性部は、「しまなみ海道」開通を機に「道の駅」に出店するために、名物じゃこ天や島ひじきの加工品開発と、週末の2日間だけの販売に取り組みました。

このとき、女性部長さんは、「女性部員には、参加できる人もいれば、出られな

い人もいる。出たくても出られない人もいる」のだからと、聞き取りをして3つのタイプわけをしました。

「販売に出られる人」

「仕込みだけに出られる人」

「常に参加できないが時間ができたときに袋詰め作業や加工作業を手伝える人」

漁村という小さな地域だからこそ、みんなが参加でき、しかも女性部の仕事として長続きできるフレキシブルな事業推進の仕組みを考えたのです。利益が出たときの配分やプール制についても、こうした、こまやかな配慮によって「地域を回していく」ことの役割りを女性部が演じた好例であろうと思います。

最後にひとこと。H A C C P（ハサップ）が注目され、どんなに資金をかけて工場や荷捌き場を整備しても、また港湾整備に投資をしても、肝心の魚価に反映しづらい時代になりました。こんな時代だからこそ、もっと、女性部のような、ささやかな活動ではあるかもしれないけれど「地域を回していける」実効ある活動に対しては、もっともっと行政的な支援が必要になるとも感じています。

（インタビュー：記事構成：

MANAなかじまみつる）

○エピソード：3人のグループによるエネルギー活動は〇うみ・ひと・くらしフォーラムHP：
<http://www.geocities.jp/umihitokurashi/index.htm>
をごらんください。全国の女性部や女性グループの活動を紹介した、きれいに編集された「NET」誌も発行しています。活動する人やグループの情報収集の場と活動をつなぐ「橋渡し役」になろうと奮戦する三人の活動そのものが、これまで見られなかった新しい風を生んでいます。